

# Yogabhāṣya における vāsanā —— saṃskāra との比較を中心として ——

金 菱 哲 宏

## 1. はじめに

Patañjali による *Yogasūtra* (以下 YS, 2-4 世紀) ならびに Vyāsa によるその註釈書である *Yogabhāṣya* <sup>1)</sup> (以下 YBh, 5-6 世紀 <sup>2)</sup>) では、ある現象が起こり、その余韻、印象あるいは潜在的に残存している影響力を表すのに “saṃskāra”, “vāsanā” という概念が用いられている。現代ではともに「潜在印象」などと訳される <sup>3)</sup> のであるが、これらの二概念はどのように違うのであろうか。①潜在印象としての潜伏期間、②顕在化して発揮される機能 (主要な働き)、③滅という 3 つの観点から saṃskāra と vāsanā を比較し、その比較を通じてこれら二概念の違いを探っていくのが本稿の目的である。またこの二概念が同時に言及されるのが YBh の中に三箇所見られる。その箇所の記述に関しては、両概念の特質を比較したのちに分析する <sup>4)</sup>。

## 2. saṃskāra と vāsanā の比較

①**潜伏期間** vāsanā の潜伏期間は YS, YBh の多くの箇所で語られることである。YS IV 10 などで述べられるように「無始の頃より存在する。」また、YBh II 13 の中で業 (karman) との対比で「この vāsanā は複数の生にもとづくものである」と言われている。そして YS IV 9 では生・空間・時間を越えて顕現することが解説されている。

一方 saṃskāra の潜伏期間についての明確な記述は、後に見る vāsanā と同時に言及される箇所を除いては YS, YBh に見いだすことはできない。ただし YBh I 5 で「まさに心作用と同質の saṃskāra が作り出される。そして saṃskāra から [同質の] 心作用が [作り出される]。このように心作用と saṃskāra の輪は休みなく回転していく」と言われていることから、saṃskāra が潜伏状態→顕在化→潜伏状態と短いサイクルを繰り返すものであるということがわかる。

②顕在化して発揮される機能（主要な働き） saṃskāra からは、YS IV 27 では「想念 (pratyaya)」が、YBh I 11 では五種の心作用 (citta-vṛtti) の一つである「想起 (smṛti)」が生じると言われている。また YBh I 5 では「心作用」が生み出される原因と考えられている。

その一方で vāsanā は、YS IV 8 に「その結果、そ〔の業〕の異熟にまさに応じた vāsanā が顕現する」と言われるが、顕現して何が生じるのかということについては註釈でもはっきりと述べられてはいない。しかし vāsanā が心にどのような作用を及ぼすのかということに関しては、何度か言及がなされている。その一つが「心を多様にする」というものであり、YS IV 24 などと言及されている<sup>5)</sup>。またもう一つの vāsanā の働きとして「心が役目をもって再び戻ってくる」ようにするというのがある。YBh IV 10 で「無始以来の vāsanā に満ちたこの心は誘因のために、ある vāsanā を再び得て、プルシャの享受のために戻ってくる」と言われる。このような vāsanā の働きは YBh の中で何度か言及される<sup>6)</sup>。

③滅 YBh I 50-51 では「生起の saṃskāra (vyutthāna-saṃskāra)」が「三昧の智から生じた saṃskāra」によって抑止され、さらにそれが「抑制の saṃskāra (nirodha-saṃskāra)」によって抑止され、無種子三昧が実現されることが説明されている。つまり saṃskāra は saṃskāra 自身によって抑滅される。

それでは vāsanā はどのようにして滅されるのであろうか。vāsanā の滅に関しては、saṃskāra ほどには詳しく論じられていないが、YBh IV 11 において「意識が役目を終えていると、拠り所をなくしてしまった vāsanā は存在することができなくなる」と言われている<sup>7)</sup>。このことから類推すると、YBh I 50-51 の記述において「智慧から作り出された saṃskāra は、煩悩を滅する原因であるので心を役目によって特徴づけることはない (YBh I 50)」、 「それらの〔抑制の〕 saṃskāra は心の役目を抑制する (YBh I 51)」と解説されているように、saṃskāra が自らを滅していくなかで心は役目を終え、それと同時に vāsanā も滅されるという事実が導き出される。

### 3. saṃskāra と vāsanā が同時に言及される箇所の記事に関して

これまでは saṃskāra と vāsanā を別個のものと考え三つの観点からそれぞれ比較してきたが、この二概念が同時に言及され、一方が他方を包含するような仕方で説明しているのが YBh 中に三箇所見いだされる<sup>8)</sup>。これらの箇所で saṃskāra と vāsanā が同時に言及されることの理由としては次のように考えられる。「想起

の原因」として語られる saṃskāra に「複数の生を越えて顕現する」という性質を持たせるため、「無始の頃より存在」し、「複数の生にもとづく」ものである vāsanā との同一視が行われたのではないか、というものである。YBh III 18, IV 9 ではまさに saṃskāra が複数の生を越えて顕現するということを言う必要があるため vāsanā の存在が要請されていると見ることができる<sup>9)</sup>。その理由は何であれ、saṃskāra と vāsanā が同時に言及されるこれら三箇所の記事では、これ以外の箇所と言及されるそれぞれの概念の性質が反映されていることは確かであり、Vyāsa はそれぞれの概念の用い方に一貫性を持たせていることには変わりない。

#### 4. 結論

vāsanā は、saṃskāra と比べるとその潜伏期間がはっきりと YS, YBh の中で示されている。すなわち「無始の頃より存在」し、「複数の生にもとづく」ものであるということである。このような無限の過去生から蓄積された vāsanā に影響されて心は「多様」となり、心がこの世に再び戻ってくる。このような vāsanā の性質を一言であらわすとするとき〈過去指向的〉とでも言えるであろうか。vāsanā という表現が用いられる場合には“今ではない、無限の過去に生み出された”という側面が強調されているように思われる。そしてこのような vāsanā は、saṃskāra が滅される過程で副次的に滅されるが、直接に滅する方法は存在しない。また、saṃskāra が瞬間瞬間の想念として顕現するのに対して、vāsanā は心の潜在的な部分に影響を及ぼし、心の恒常的な傾向を決定するものと見ることもできる。

これに対して saṃskāra は〈現勢的〉とでも言おうか、“今、ヨーギンが関わるもの”として記述されている。想起、想念、心作用を生み出すものであり、そしてそれらからまた新たな saṃskāra が生み出される。vāsanā に比べると“今まさに起こりつつあるもの”というダイナミックな側面が強調されているように思われる。今まさに起こりつつあるものであるため、三昧の智から生じた saṃskāra、抑制の saṃskāra により停止させることができるのである。またその結果、心は役目を終えてしまい vāsanā の拠り所であることをやめ、vāsanā をも滅してしまう。

saṃskāra と vāsanā は時に同じものとして Vyāsa は解説しているが、この二概念の性質が同時に言及される必要がある際にそのようにされているのであって、このような vāsanā = 〈過去指向的〉、saṃskāra = 〈現勢的〉という使い分けを損ねるものではない。

以上のことから YBh において vāsanā と saṃskāra は、それぞれ一定の性質を持っ

(236)

Yogabhāṣya における vāsanā (金 菱)

たものとして Vyāsa によって使い分けられていることが確認できた。ただし、これら二つの概念は全くの別物というのではなく、「潜在印象」の異なる二つの側面と考えるのが妥当であろう。

- 
- 1) 本稿では以下を定本として用いた。 *Pātañjalayogasūtrāṇi with Vyāsa's Bhāṣya and Vācaspati Miśra's Tattvavaiśārādī*, ed. the Anandasrama pandits. ASS 47, 1978. 2) YS および YBh の成立年代に関しては諸説あるが、本発表では暫定的に金倉 [1953] の説に依拠した。 3) 漢訳仏典では前者は「行」、後者は「薰習」、「習気」などと訳される。 4) Ybh における saṃskāra と vāsanā の違いということに意識的なものとしては以下の3つが挙げられる。Dasgupta [1932], 佐保田 [1975], 山下 [1976]。ただし、いずれも vāsanā を主題として論じてはいない。 5) ほかに YBh II 1, 13, 15 など。 6) ほかに YBh II 15, II 24, など。 7) YBh I 51, II 27, III 55, IV 34 を参照。この文脈では役目をもって戻ってくるのは「心 (citta)」と言われたり、「意識 (manas)」, 「ブッディ (buddhi)」, 「グナ (guṇa)」と言われたりもする。いずれもサーンキヤ的二元論におけるプルシャの対概念としてのプラクリティが展開したものと考えてよい。 8) YBh II 13, YBh III 18, YBh IV 9. 9) YS III 18 では「saṃskāra をまのあたりに見た [ヨーギンには] 前世の知 [が生じる]」, YS IV 9 では「生・空間・時間によって隔てられていても, [vāsanā は] 隔たりなく [顕現する]。記憶と saṃskāra とが一つのものとして存在するから」と言われており、いずれも saṃskāra が生を越えて顕現することに関係している。

#### 〈参考文献〉

Dasgupta, Surendranath [1932] *A History of Indian Philosophy*, I, Cambridge University Press, London, reprinted edition. 金倉圓照 [1953] 「ヨーガ・スートラの成立と佛教との関係」, 『印度學佛教學研究』1-2, pp.259-268. 佐保田鶴治 [1975] 「パタンジャリの煩悩思想をめぐって」, 『煩悩の研究』, 佐々木現順編, 清水弘文堂, pp.41-69. 山下幸一 [1976] 「ヨーガ学派に於ける Saṃskāra について」, 『印度學佛教學研究』49 (25-1), pp.152-153.

〈キーワード〉 vāsanā, saṃskāra, Vyāsa, Yogabhāṣya

(京都大学大学院)